

展をとげたのに対し、社会人類学は主にイギリスで展開されたという学問の成立ちの問題があり、同時に、学問の対象・方法・性格づけをめぐって若干の相違がみられます。たとえば、文化人類学は文化

——なかなか定義が難しい概念ですが、自然に対する概念で、人間の生活の方法とでも定義しておきましょう——に関する「総合科学<sup>サイエンス</sup>」としての色彩を強くもっているのに対し、社会人類学は人間関係の分析をベースにし、そこから社会構造という人間関係の骨格部分を抽出してゆくことを強調するといったように。この意味では社会人類学は広義の社会学に含まれ、英国社会人類学の創設者のひとりラドクリフ＝ブラウンは、この学問をフランス社会学（デュルケム）の伝統と結びつけて「比較社会学」とよんだわけです。けれども、この2つの人類学は、ともに19世紀ヨーロッパで民族学とよばれていた学問から発展してきたわけで、とくに「未開社会」に代表される欧米にとっての異文化・異社会の研究を通して人間の社会や文化を考えるという点では同様でありまして、今日、その名称の違いに固執することはあまり意味があるとはいえません。

Q：なぜ「未開社会」あるいは異文化・異社会に関する研究をするのですか？

A：近代の学問は、いうまでもなく欧米を舞台に展開されてきました。そして、とくに人文・社会科学の場合、その理論構築のためのモデルは西欧の市民社会でした。ところが、19世紀の後半になりますと、非西欧社会に関する知識が体系的に研究されるようになりまして、もし普遍的な人間理解や社会理解に至ろうとすれば、こうした非西欧社会に関する材料をもとり込まなくてはならないと感じられるようになりました。そこでは西欧的な人間や社会の理解モデルが必ずしも妥当しないわけで、こうした異文化をもつ社会の代表として「未開社会」があったわけです。これが社会人類学の出発点です。以来、社会人類学は「未開社会」の研究を通して異文化を内面的に理解しようと試み、人間や社会の理解モデルを拡げてきたといえるでしょう。その意味では、この学問は西欧の自己批判学であったわけです。

Q：今日でも「未開社会」の研究が主流なのですか？

A：かつて「未開社会」とよばれた諸社会の多くは、

今日国際社会の一員として独立し、好むと好まざるとにかかわらず「近代化」の波にさらされて、大きな変容を受けています。その意味では、もはや古典的な「未開社会」研究はあり得なくなっています。一方、社会人類学者の関心も、かつての「未開」研究から、農村研究、あるいは今日では都市人類学という研究分野もあらわれ、「文明社会」を研究対象としている学者も多くいます。また歴史的事件を素材にした研究も行なわれています。こういうわけで、今日社会人類学を「未開社会」の研究だと定義するわけにはいかず、それは現実をある独特の方法で説明してゆく学問分野だといえるかもしれません。

Q：「独特の方法」といいますと？

A：第1は、この学問の伝統であるフィールドワークという方法です。社会人類学者は、彼が研究しようとする社会——多くは彼が生まれ育った社会とは異なる社会——に一定期間（通常2年間）住み込んで、その土地の言語を習得し、その人々と同じような生活をするを通して、その社会を身をもって学びとる、あるいはいわば体をはって調査研究を行ないます。これがフィールドワークで、私の場合は、インドネシアのスラウェシ（セレベス）島のトラジャとよばれる人々の間で、1976/78年にかけてフィールドワークを行ないました。この方法の利点は、社会を「内側から」みることができるという点です。このきめ細かな観察体験は、書物や机上での人間・社会理解ときわめて異質な視点を提供してくれます。社会人類学者が「文明社会」（農村・都市・歴史）を研究してゆく場合も、この方法・視点から問題を考えてゆこうとします。第2は、比較という方法です。そもそもフィールドワーク自体が、異なる社会の論理を自分たちの言葉に「翻訳」しようという暗黙裏の比較が前提とされています。こうしたフィールド経験を通して、社会人類学者は、現実をいわば「複眼的に」みる方法をまねとります。ですから、彼が「文明社会」を研究する場合も、「未開社会」との対比において考察してゆくということになります。これによって、いままで気付かなかった「文明社会」の論理が明らかになり、またそれによって「文明社会」の特質が浮彫りにされてゆくわけです。

Q：最後に、いま社会人類学をやる意義は？

A：一言でいえば、今日異社会を理解することなしには我々の生活それ自体が成立ってゆかないという現実があると思います。比喩的に言いますと我々の



時代は「ひとつの言語」で片がつく時代ではない（ポーブ）わけです。今日の日本は、欧米ばかりではなくかつての「未開社会」、今日の言葉でいう「発展途上国」との相互理解なくしては、国際社会の中でやっていけないわけですし、より内在的には、

近代社会の中で情性化され変形してしまった「人間精神」（レヴィ・ストロース）の可能性あるいは自由を追求しようと思えば、人は社会人類学という学問に出会うというわけです。もっとも、私がそれをどこまでやれるかは、また別の問題ですけれども。

（アジア研究・講師）

<シリーズ・大学研究所めぐり>

## その6 英国の新大学—イーストアングリア大学—

長谷川 正 之



英国の典型的な新大学、それが私の滞在していたイーストアングリア大学である。ロンドンの北東約100マイル、ケンブリッジから約60マイルのNorwich（ノーリッチと発音する）という美しい町にある。ここには、本学に赴任

する前に約2年半（1976～1978年）と昨年約半年間滞在した。英国では1960年代に、新大学構想にもとづいて、新しい大学が続々と誕生した。その一番手がブライトンにあるサセックス大学で、イーストアングリア大学は二番手だそうである。この大学は、日本流に言えば、理法文経関係の学科から成る学生数約3500人の比較的小さな大学である。電子工学関係の部門も設置される計画であったが、国の財政難と重って、結局実現しなかったという。これは、主として理工系が増強された日本の状況と全く対照的である。

日本の新大学構想と云えば、誰でも筑波大学、すなわち管理強化型の大学を連想するだろう。しかし、英国の場合は逆で、古い伝統と政府の干渉から開放された自由な雰囲気のある大学が多いようである。事実、イーストアングリア大学は英国で最も民主的な大学だという評判を耳にした。もっとも、そのために会議と雑用が多くて大変だという不満も時々聞いた。日本では、新大学構想を確立するに当って、世界中に視察団を派遣し、英国の新大学（特にサセックス大学）も重要な視察対象であったという。それにしても、英国の新大学と筑波大学には、学生と教官の自由度に関する限り、何の共通点も感じられない。多分、視察団のメンバーは、一般教官を管理運営面から開放して会議と雑用を少なくしてやり、学生を教

科の勉強だけに熱中させてやろうという親切的な親心の持ち主だったに違いない。

イーストアングリア大学の自然科学系は、数学・物理、化学、生物および環境科学のスクールから成り、名前から判断する限り、本学の総合科学部の自然科学系と非常に良く似ている。私が所属していたのは数学・物理のスクールで、教官数が20人余、外来者その他が数人の小世帯である。最初の滞在期間中は、研究組織としての大学の側面だけに注目して、教育に関しては断片的な知識を仕入れただけであった。昨年出掛ける前には、教育問題の重要性を痛感していたこともあって、何かを学んでくる意気込みであった。ところが、広島を離れるや否や、日頃の忙しさから開放された嬉しさのあまり、この初心をすっかり忘れてしまった。そこで、英国の大学制度についての断片的な感想だけを紹介しておこう。英国の大学の修業年数は普通3年で（工科系や医学系ではもっと長い）、一般教養課程はなく専門教育だけである。この専門系列化はすでに高校で始まり、例えば、物理系の大学に進む学生は高校で物理、化学、数学および語学だけを勉強するのが普通である。専門外の勉強は、その気になれば色々な機会を利用して出来るから、単位の枠をはめてまで強要する必要がないという発想であろう。全く主観的な感想であるが、日本の学生にくらべて、彼らに一般教養が不足していると感じたことは一度もない。したがって、日本の大学制度は再検討を要すると痛感した次第である。大学院には、修士を經由して博士課程へ進むコースと、初めから博士課程に進むコースがある。文科系では、修士と研究生の中間のようなコースもあり、何度話を聞いても、制度についての完全な理解にはついに到達しなかった。自然科学系では、初めから博士課程に進むのが普通である。しかし、



3年間で博士号を取ることは最近では事実上不可能で、大体4～5年はかかってしまう。もしそれでも博士号が取れないと、すべてがむだになってしまう。これに対して、修士を經由すれば、時間はかかるが、少くとも修士の資格は取れるので、安全性を重視する留学生はこのコースを選ぶこともある。

イーストアングリア大学には、大変興味深い研究教育組織として Developing Study (学科に相当) と呼ばれるものがある。そこでは主として発展途上国の政治・経済・社会問題を研究している。英国ではこのような研究が盛んであると聞いたが、これはまさに植民地支配の名残りであろう。学生は本国人と外国人(主として旧植民地からの留学生)が半々くらいだという。この学科の修士と研究生の間のようなコースに在籍する留学生はあまり若くなく、20代の後半から30代の学生がかなり多い。私は約3年間の滞在期間中の大部分を大学構内の外来者用の宿舎に住んでいたが、家族のある年配の留学生の何人かも棟続きの同じ宿舎に住んでいた。このため何かと話をする機会が多かった。彼らの多くはいわゆる上流階級の出身者で、国に帰れば有望なポストが約束されている人が多いようであった。我々に対しては、「日本ではどんな大きな家に住み、何人の召使いを使っていますか」と必ず一度は質問する人が多かった。そこで正直に、「日本には家もなければ召使いもない、それに適当なポストもない失業者だから仕方なくここで働いている」、と答えると皆信じられないという顔をしていた。このときばかりは、経済大国日本での我身の境遇の貧しさをかみしめたものである。ところで、この Developing Study には日本人の留学生もかなりやってくる。彼らの多くは官庁の役人や一流企業の社員で、1～2年の予定で出張でやって来る。彼らは、いわゆる一流大学の出身者で、大学教育はすでに終了しているので、留学の目的が理解できなかった。キャンパス内の宿舎に住んでいたため、彼らの何人かと付合



手前が外来者用宿舎、後方が図書館

う機会があったが、その時よく不平を言っていた。「授業の中味は日本の大学ですでに勉強したものが多く、それを英語で改めて勉強しているに過ぎない」、「授業の程度が低くて面白くない」、「こちらの学生は貧乏で満足なものを食べていないので付合づらい」等々。日本の一流大学の出身者で、政府や一流企業をスポンサーにもつ高級サラリーマン留学生にとっては、全くもったもな話である。しかし、何かがおかしい。要するに、留学してくること自体がおかしいと思った。それも Developing Study に在籍するのは、先進国日本を誇りにする彼らの態度に似つかわしくない。しかも、いわゆるエリートとして、職場と一族から「洋行万才」の声に送られて来るのが大部分だと聞けば、ますますコッケイな話である。経済腺肥大、留学妄想狂の典型的な症状と診断したが、処方センを書くのは、古い価値観にとらわれない若い皆さんにお願いしたい。

一流のゴルフ場をつぶして二流の大学を作ったと悪口を言う人もいるこの大学のキャンパス内に長年住んでみると、本学の貧しい環境は身にこたえる。正門から入った表通りに面した所はともかくとして、一步裏にまわると、西条移転を控えているとは言え、まるでスラム街同然である。移転後は、不毛の山地を切り開いて一流の大学(少なくともキャンパスだけは)を作った、と言われたいものである。

(基礎科学研究・助教授)

## 「走馬看花」—中国旅行の印象—

地域文化コース  
(日本研究)3年 北村浩司

訪中団の一員として、31名の学友とともに中国を旅行する幸運に恵まれた。ここに報告をかねて、自分の感じた「中国」の印象を書き記したい。

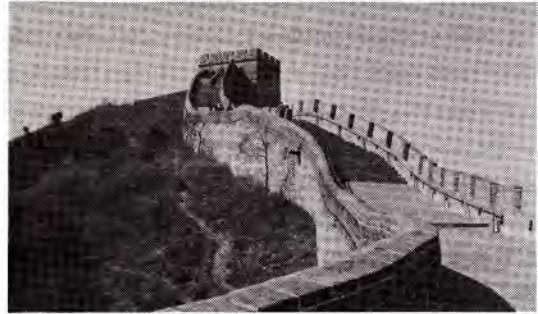
《序章—北京へ》

私はさる3月11日から22日の12日間、小林文男先生を団長とする、『第二次広島大学学生友好



中国における全行程は、北京—西安—延安—上海のルートであった。かなりの広大な地域を足早に巡ったことになる。その意味ではまさに「走馬看花」である。見るものの全てが今までに出会ったことのないものであったし、それぞれの土地での感想や、見聞した記録、資料などを仔細に書き留めれば膨大な量のものになるであろう。しかし、私はここでそういう記録中心の文章を書こうとは思わない。私は中国の問題を専攻しているわけではない。中国語も殆んど話せない。それでも敢えて「感じたままの中国」を書こうと思う。細かい点で知識に誤りもある。見方も一面的だろう。専門家から見ればとるにたらない文章と言えるに違いない。けれど、現実には日本の一人の人間が中国へ渡ってこういうことを感じたのだという事実は変わりようがない。そのことをあからさまに示すほうがむしろこの拙文を読む人に何らかの形で参考となるのではないかとひそかな希望を持っている。特にここでは中国において、主に日本語で、あるいは通訳の人を介して中国の人々（特に同世代の青年たち）と語り合った印象を述べたい。もちろん海外へ行った以上、その国の言語で語り合うべきだろう。しかし、私の語学力ではとてもそこまで及ばないので、あくまでも「日本語」での対話であることを断っておかねばならない。

私が北京へ降り立ったのは3月11日の夜8時を過ぎていた。電燈の明かりが妙に薄暗く、空気が乾燥し、ほこりっぽかったことが鮮明に記憶に残っている。その北京空港で初めて中国人と接触するわけである。最初に言葉を交わしたのが通訳のPさんとLさんという二人の女性である。彼女たちは現在、北京第二外国語学院の助教（助手）で年齢はともに24才であった。（彼女たちは学生ではないが、中国においては学生の年齢が日本より相対的に高い。理由としては大学へ入学すること自体がかなり困難であること、文化大革命の影響などで教育制度に揺れがあったことなどがあげられる。そのため、一度就職してから大学へ入学することも少なくとも、30才を超えた学生にも何人か出会った。）彼女達とは旅行の最後まで行動を共にしていただいたので話をする機会も多く、我々が教えていただくことも多かった。まず私が驚いたのは、彼女たちが日本語を学び始めてから3年しかたっていないのに、極めて日本語に堪能であったことである。これは他の土地で話した日本語を学ぶ人々にも言えることで、それぞれ日本語の修得のためにかなりの労力を費しておられ



万里の長城（八達嶺附近）

るようだった。しかし、語学力というものは言語そのものを研究対象にする場合を除いては、学問の道具として使われるものであろうが、そのことばかりに集中的に労力を使うのは少々疑問に思える。例えば日本の文化を考える上で不可欠と思われる西洋文化の影響に対する理解が意外に貧弱なことなどである。しかし、日本語を学んでいる人は増えているようで、彼女らの話によると、中国は今かなりの日本ブームだそうである。「日本の科学技術が秀れているのは有名だ。私達はそれを四つの現代化のために学びたい。」という趣旨の発言を各地で聞いた。日本ブームと、それにとまなう日本語熱とは反比例して、最近衰えが激しいのがソ連に対する関心だそうである。ロシア語を学ぶ機会そのものが得がなくなっていることもあって、ロシア語を学んでいた人が日本語へ鞍替えするケースもあるとのことであった。この状況は政府の外交政策が微妙に反映されているのであろうが、日本と状況が似かよっているように思われる。しかし、これは決して良い傾向とは言えないのではないか。外交関係が悪化している国を理解する努力を自ら放棄すれば、後に残るのは誤解と断絶だけになりはしないか。さらに「日本ブーム」と言っても、あくまで主眼に置かれているのは科学技術であり、あるいは科学技術を支えるものに対してのブームである。北京図書館を見学したときの説明で、日本の書物を購入する場合の選定基準として、「科学技術に関するものは殆んど無条件に、その他の人文・社会科学に関する書物は中国に必要と思われるもののみ」ということがあるということであった。つまり、人文・社会科学に関するものは一定のフィルターを通さないと入ってこないことになる。果して「中国に必要」とはいかなることか。日本ブームも少々怪しい。日本と中国の相互理解を考える上でも、日本における空虚な「中国ブーム」と同じく、中国における「日本ブーム」に再考の余地はあ



りそうである。その証拠に、日本を研究している多くの人が我々の日常生活を実体としてつかんでいない。我々が何を食べ、何を行い、何を考えているかということから地域文化の理解は始まるのではないか。科学技術一辺倒の表面的な文化理解は悲劇を生み出すことになりはしないか。

#### 《 中国人の国際観 》

日本、ソ連に触れたついでに中国人青年の『国際観』にも触れておく。北京で通訳のPさんに質問した。「あなたはどの国が一番嫌いですか？」彼女は少し考えて「ベトナムです」と答えた。理由は「ベトナムはベトナム戦争のときに中国から多大の援助を受けた。ところが今、ベトナムは中国に恩を仇で返している」というのだ。ベトナムが今あるのは中国のお陰だとも言うのか。中国人の頭の中には伝統的な《 宗主国一属国 》関係からくるベトナム蔑視の意識があるのではないかと勘ぐりたいような話である。彼女にそのことを問うと否定はしたが、僕の疑問は残った。またソ連も嫌われものの一つである。今日、かつての中ソ蜜月時代の痕跡を残すものはわずかになってしまった。中国に反逆するベトナム、そしてそれを背後から操る腹黒い国、それが中国人の考えるだいたいの隣国観だという。そこには国と国、力と力の対立という単純なパワーポリティクスの世界観しか存在していない。社会主義とはそのような貧困な世界観を否定し、人民大衆を基軸に世界を考える思想ではなかったのか。社会主義だの資本主義だのという議論は一体何だったのかと思わざるをえない。

華東師範大学という、上海にある重点大学（国家が特に力を入れている大学。すなわちこの学生はエリート予備軍というわけである。）の日本語科のFさんという人物と語り合った時にも同じ質問をした。彼は「歴史や世界政治を国単位で考えるのには賛成できない。しかし、多くの人がそう考えている。」と話してくれた。彼の見識の高さに敬服させられるとともに、自分の質問の稚拙さを恥じた。しかし、その彼でさえ、「中越紛争では中国は絶対に悪くない。中国の軍隊は決して人民の敵ではない。」ときっぱり言い切ったのには驚いた。日本における報道を総合してみると事情はそうではないようだと言論しても決して彼はそれを受け入れてはくれなかった。

#### 《 民主、軍事力、人民 》

さらにFさんとの対話である。私は問うた。「現代の中国は、文革中よりましだとはいえ、人々の言



北京市内の裏路地

論や表現など、様々な自由が依然として規制されているが、それをどう考えるか。」彼は答える。「中国の現状は確かにその通りだ。もっと民主化が図られるべきだと思う。私も含めて、多くの学生の考え方は必ずしも政府の方針に賛成ではないのです。」

彼は身をのり出して答えてくれた。思想の自由の必要性を堅く信じていた。もちろん我々の考える『自由』と彼らの考える『自由』が同質のものとは思わない。しかし、彼は「思想が違うからといって人を罰することはできない。」と言った。「大学」という限られた空間ではあっても、中国にも当然のように柔軟な思考は息づいているのであろう。

さらに話を進めて、魏京生裁判についても尋ねてみた。「魏京生は確かに思想犯として罰せられるべきではないだろう。しかし、彼の思想は非科学的な無政府主義であり賛成できない。また、彼はベトナムへ軍事機密を流した。これは明らかに罪である。」と彼は言った。残念ながら、この件に関しての私自身の知識の不足のために、問題をさらに深めることができなかった。

さきにも書いたが、日本人の考える「自由」と彼ら中国人の考える自由には明らかに質的な差がある。概して彼らは急激な民主化自由化は望んでいないようだ。その根底には「自由」の反動としての統治機能の低下や政状の混乱に対する危惧があるようだ。「日本は自由すぎるので混乱が起きるのではないですか。」とは通訳のLさんの発言である。現に中国では特に都市を中心に治安の悪化が言われている。我々も上海での単独自由行動はついにできなかった。事情はこれも複雑だと感じた。

Fさんとの会話で、もう一つ書き記しておきたいことがある。それは彼の人民解放軍（すなわち中国の軍隊）に対する信頼がきわめて厚いことである。さきにも書いたとおり、彼は「人民解放軍は決して人民の敵にはならない。」と信じている。また、一般の